史料研究

マムルーク朝におけるファダーイル・バイト・アルマクディス編纂

岡本　恵

はじめに

ファダーイル・バイト・アルマクディス Faḍā'il Bayt al-Maqdis は、イスラーム世界において数多く編纂された「ファダーイルの書」と呼ばれる作品ジャンルの一種である。ファダーイル faḍā'il（s. faḍīla）とはアラビア語で優越性、優秀さ、美点などの意味を表す言葉であり、転じてある対象の優れた点を列挙し、それを称えることを目的に編纂された書物や、そうした書物を扱うジャンルを表す言葉ともなった。ファダーイルの書が讃美の対象とするものには様々あり、クルアーン、正統カリフをはじめとする個人や人々の集団、都市や地域、あるいはラマダーン月など特定の月やジハードなどの抽象概念まで多岐にわたっている(1)。本稿では、以下作品ジャンルとしてのファダーイル・バイト・アルマクディスを FBM と略称する。

こうした多様なファダーイルの中で、FBM はアクサー・モスクを中心としたエルサレムの町と、その周辺地域を取り扱った作品群である。そこにはエルサレムに関する様々な情報、例えばユダヤ教徒より伝えられた伝承（イスラーイーリーヤート Isrā'īlīyāt）やイスラーム以降の伝承、歴史・地理情報、人物伝、参詣の作法などが豊富に含まれており、歴史書、地理書、巡礼記等の他の史料とともに、ムスリムがエルサレムという場所をどのように捉えていたのかを議論する際の重要な史料となっている。しかしながら FBM は、これまでのエルサレム研究においてあまり重要視されておらず、その内容のごく一部が部分的に取り上げられてきたにすぎない。

FBM それ自体については、これまでいくつかの専門的な研究が行われている。しかしながら従来の研究の関心は主としてその起源、すなわち FBM がいつ、どのような政治的・社会的状況の中で生み出されてきたものかという点に置かれており、それぞれの FBM の内容や構成については詳しく検討されてこなかった。またこのように先行研究の関心が起源論に集中していることから、FBM の中でも初期に成立した作品のみが取り上げられる傾向にあり、比較的後期の作品はほとんど顧みられていないという問題もあった。

よって本稿では、まず第 1 章で FBM 先行研究とその問題点について指摘し、続く第 2 章以降ではそうした先行研究が注目することのなかった FBM の一例として、マムルーク朝時代に成立した FBM を 3 点取り上げ、史料研究を行いたい。第 2 章では、マムルーク朝以前に編纂された作品とは大きく異なる特徴を持つ、ファザーリー Ibrāhīm b. ‘Abd al-Raḥmān b. al-Firkāḥ al-Fazārī（d. 729/1329）による『エルサレム参詣に向けて魂を促すもの *Bā‘ith al-Nufūs ilā Ziyārat al-Quds al-Maḥrūs*』（以下 BN と略称）を取り上げる。第 3 章ではこの BN の流れを汲む FBM として、フサイニー ‘Abd al-Wahhāb b. ‘Alī al-Ḥusaynī（d. 875/1470）による『エルサレムのファダーイルに関する繁き庭園 *Rawḍ al-Mugharras fī Faḍā’il Bayt al-Maqdis*』（以下 RM と略称）と、ミンハージー Muḥammad b. Aḥmad al-Minhājī（d. 880/1475）による『アクサー・モスクのファダーイルに関する親しき友人への贈り物 *Itḥāf al-Akhiṣṣā’ bi-Faḍā’il al-Masjid al-Aqṣā*』（以下 IA と略称）を取り上げる。本稿ではFBM作品群の中におけるこれら 3 作品の性格や位置づけを明らかにし、FBM 研究に新しい視点を加えること、またこれらのエルサレム研究における歴史史料としての有用性を示すことを目標とする。

第 1 章：FBM先行研究とその問題点

1．写本研究

FBM に関する先行研究には、まずアサリー Kāmil Jamīl al-‘Asalī(2) に代表されるアラブ人研究者たちによる写本研究がある。これは、

存在が確認される FBM についてその著作名や著者名について一覧にした上で、その著作の写本が現存するかしないか、現存するものについてはそれが所蔵されている図書館とその請求番号を調べた研究である。例えばアサリーは、3/9 世紀から14/20世紀の間に書かれた FBM を、写本が現存しないものや著者不明のものも含めて年代順に49の作品を数えている。この研究により FBM という分野にどのような著作があるのかがおおかたのところ明らかになっており、以降の研究者はこのリストを元にして FBM 研究を進めることができる。その点でアサリーによる成果は FBM 研究の出発点として重要なものである。

しかしながらアサリーは、何をもって FBM と見なすのかという明確な定義づけを行っておらず、明らかにその範疇には入らない作品までリストに含めているという問題点がある。例えばファダーイル・アッシャーム Faḍā'il al-Shām がリストに入っているが(3)、これは地域としてのシリアと、ダマスカスを中心としたシリアの各都市についてのファダーイル集であり、エルサレムを扱うものではない。この点を修正すべく、筆者は本稿における FBM を「バイト・アルマクディス（エルサレムのまち、あるいはアクサー・モスク）に主眼が置かれ、それらに関する伝承、歴史的・地理的情報を 1 冊の書物としてまとめることで、バイト・アルマクディスの美点を知らしめ称賛することを目的に編纂された作品」と定義する。別頁の表は、アサリーのリストの中からこの定義に当てはまらないものは除外した上で、本稿で取り上げるマムルーク朝時代に至るまでの FBM をまとめたものである。なおこの表では著者不明の作品については対象外とし、また彼が取り上げていない FBM を 2 作品(4)追加している。以後この表に基づいて議論を進める。

2．FBM の起源についての研究

アサリーによる写本研究の他に、FBM を取り扱った主要な先行研究の中には、FBM がいつごろ、どのような社会的要因の中で生まれてきたものであるのかという、FBM の起源に関する議論があ

［表］　ファダーイル・バイト・アルマクディス著作リスト

番号	著者名	書名
1	Ishāq b. Bishr al-Bukhārī	*Kitāb Futūḥ Bayt al-Maqdis*
2	Mūsā b. Sahl al-Ramlī	*Kitāb Man Nazala Filasṭīn min al-Ṣaḥāba*
3	Aḥmad b. Khalf al-Subḥī	*Akhbār Bayt al-Maqdis*
4	al-Walīd b. Ḥammād al-Ramlī	*Faḍā'il Bayt al-Maqdis*
5	**Muḥammad b. Aḥmad al-Wāsiṭī**	***Faḍā'il al-Bayt al-Maqaddas***
6	**Musharraf b. al-Murajjā al-Maqdisī**	***Faḍā'il Bayt al-Maqdis***
7	Makkī b. 'Abd al-Salām al-Rumaylī	*Faḍā'il Bayt al-Maqdis*
8	'Alī b. al-Ḥasan Ibn 'Asākir	*Faḍā'il Bayt al-Maqdis*
9	**'Abd al-Raḥmān b. 'Alī b. al-Jawzī**	***Faḍā'il al-Quds***
10	Qāsim b. 'Alī Ibn 'Asākir	*Jāmi' al-Mustaqṣā fī Faḍā'il al-Masjid al-Aqṣā*
11	Ḥasan b. Habbat Allāh b. Ṣaṣrā al-Dimashqī	*Faḍā'il Bayt al-Maqdis*
12	Aḥmad b. Muḥammad Ibn 'Asākir	*Uns fī Faḍā'il al-Quds*
13	'Abd al-Raḥīm b. 'Alī al-Qurashī al-Isnā'ī	*Miftāḥ al-Maqāṣid wa Miṣbāḥ al-Marāṣid fī Ziyārat Bayt al-Maqdis*
14	**Muḥammad b. 'Abd al-Wāḥid al-Maqdisī**	***Faḍā'il Bayt al-Maqdis***
15	Muḥammad b. Maḥmūd al-Baghdādī	*Rawḍat al-Awliyā' fī Masjid Īliyā'*
16	'Abd Allāh b. al-Ḥasan Ibn 'Asākir	*Faḍā'il Bayt al-Maqdis*
17	Ibrāhīm b. Yaḥyā al-Miknāsī al-Tilimsānī	*Faḍā'il Bayt al-Maqdis wa Faḍā'il al-Shām*
18	Muḥammad b. Muḥammad al-Kanjī	*Faḍā'il Bayt al-Maqdis wa Faḍā'il al-Shām*
19	**Ibrāhīm b. 'Abd al-Raḥmān al-Fazārī**	***Bā'ith al-Nufūs ilā Ziyārat al-Quds al-Maḥrūs***
20	Aḥmad b. 'Abd Allāh	*Silsilat al-'Asjad fī al-Masjid al-Aqṣā*
21	Khalīl b. Kaykaldī al-'Alā'ī	*Masā'il al-Uns fī Tahdhīb al-Wārid fī Faḍā'il al-Quds*
22	'Abd Allāh b. Hishām al-Anṣārī	*Taḥṣīl al-Uns li-Zā'ir al-Quds*
23	**Shihāb al-Dīn Aḥmad b. Muḥammad al-Maqdisī**	***Muthīr al-Gharām ilā Ziyārat al-Quds wa al-Shām***
24	Muḥammad b. Maḥmūd b. Isḥāq al-Maqdisī	*Tārīkh al-Quds*
25	Muḥammad b. Muhibb al-Dīn 'Abd Allāh	*Tajrīd Man Nazala Bayt al-Maqdis*
26	Ḥamza b. Aḥmad al-Ḥusaynī	*Faḍā'il Bayt al-Maqdis*
27	'Abd al-Wahhāb b. 'Alī al-Ḥusaynī al-Dimashqī	*Rawḍ al-Mugharras fī Faḍā'il Bayt al-Maqdis*
28	**Muḥammad b. Aḥmad al-Minhājī al-Suyūṭī**	***Itḥāf al-Akhiṣṣā' bi-Faḍā'il al-Masjid al-Aqṣā***

＊グレーの欄は作品が現存しないもの。＊S：シャーフィイー派、HB：ハンバル派、出版されているもの。（al-'Asalī, *Makhṭūṭāt Faḍā'il Bayt al-Maqdis* を参考に筆者が作成）

生没年（場所）	法学派	著者の経歴
生？（バルフ）　没206/821（ブハラ）		
生？　没261/874-5		
H3C-H4C		
生？　没 ca. 300/912-3		
生？　没 p. 410/1019（エルサレム）	S	アクサー・モスクのハティーブ
生？　没 ca. 450/1058（エルサレム）		エルサレムのムフティー
生432/1040（ルマイラ） 没492/1099（エルサレム）	S	Ibn al-Murajjā(6)の弟子
生499/1105（ダマスカス） 没571/1176（ダマスカス）	S	ヌーリーヤ学院（ダマスカス）のシャイフ
生510/1116（バグダード） 没597/1201（バグダード）	HB	バグダードのハティーブ
生527/1133（ダマスカス） 没600/1203（ダマスカス）	S	Ibn ‘Asākir(8)の長男　ヌーリーヤ学院（ダマスカス）のシャイフ
生537/1133（ダマスカス） 没586/1190	S	Qāsim Ibn ‘Asākir(10)の弟子
生542/1148（ダマスカス） 没610/1213（ダマスカス）	S	Ibn ‘Asākir(8)の甥 Qāsim Ibn ‘Asākir(10)の従弟
生550/1155（イスナー） 没625/1228（ダマスカス）		アイユーブ朝 Malik al-Mu‘aẓẓam のワズィール
生569/1174（ダマスカス） 没643/1245（ダマスカス）	HB	Ibn al-Jawzī(9), Aḥmad Ibn ‘Asākir(12)の弟子
生578/1183（バグダード） 没643/1245（バグダード）	S	Ibn al-Jawzī(9), Muḥammad al-Maqdisī(14)の弟子
生600/1203（ダマスカス） 没645/1248		
生600/1204（ミクナース） 没666/1268（ファイユーム）	S	
生？ 没682/1283（エルサレム）		
生660/1264（ダマスカス） 没729/1329（ダマスカス）	S	バーダラーイーヤ学院（ダマスカス）のシャイフ
生？　没755/1354	HF	
生693/1295（ダマスカス） 没761/1359（エルサレム）	S	タンキズィーヤ学院、サラーヒーヤ学院（エルサレム）のシャイフ
生？　没761/1359（エルサレム）		
生714/1314（エルサレム） 没765/1364（エルサレム）	S	タンキズィーヤ学院（エルサレム）のシャイフ、al-‘Alā’ī(21)の弟子
生？（アレッポ） 没776/1374-75		al-‘Alā’ī(21)と交友関係
生712/1312 没789/1387（ダマスカス）	HB	
生818/1415（ダマスカス） 没874/1469（エルサレム）	S	
生800/1397-98（ダマスカス） 没875/1470（メッカ）	S	ダマスカス、アレッポのカーディー
生813/1410（アスユート） 没880/1475（カイロ）	S	

HF：ハナフィー派、M：マーリク派。＊著者名と書名が太字のものは、校訂本が
＊著者の経歴の欄における番号は、本表中の番号を示す。

る。

例えばシヴァン E. Sivan[5]は、現存する最古の FBM であるワースィティー al-Wāsiṭī（表番号５）の著作や、イブン・アルムラッジャー Ibn al-Murajjā（表番号６）、ルマイリー al-Rumaylī（表番号７）の著作が編纂された５/11世紀を、FBM が成立した時代であると見なしている。さらにシヴァンはその後の FBM の展開について、十字軍によるエルサレム占領の混乱により、６/12世紀前半には FBM の編纂は一時中断されたものの、エルサレム再征服プロパガンダが激化するザンギー朝のヌール・アッディーン Nūr al-Dīn Maḥmūd b. Zankī（r. 541/1146-569/1174）の時代に再びこのジャンルに対する興味が見られるようになり、ジハードの気運の高まりと共に中東全域で隆盛を見ることになったと述べており、FBM 編纂の動機に十字軍に対するジハードを挙げている。

シヴァンはワースィティー以前の FBM の存在を認識していなかったが、その後の研究で FBM の起源はより早い時期へと修正されることとなった。キスター M. J. Kister[6]やジャインボル G. H. A. Juynboll[7]は、FBM を含むファダーイルの書はハディース集から発展してきたものであり、FBM に含まれる伝承も１/７世紀後半から２/８世紀前半のウマイヤ朝時代にはすでに流通していたとしている。エルアド A. Elad[8]も彼らの意見を支持し、FBM の起源を同時期に求めている。エルアドはこの時代を FBM の起源として確定する根拠として、ワースィティーとイブン・アルムラッジャーの著作に出てくる伝承のイスナード（伝承経路）に注目している。彼はそれらの伝承の大部分が、ラムリー al-Ramlī（表番号４）に代表されるある特定の人物を経由していることを指摘し、一人の人物にイスナードが集中しているということは、その人物はエルサレムに関する伝承をすでにまとまった量で保存していたのだろうとの見解を提示している[9]。またムラード Suleiman A. Mourad[10]もワースィティーとイブン・アルムラッジャーのイスナード検証を通じてラムリーに着目しており、彼が有していた伝承の重要性を強調している。ムラードは、ラムリーが依拠する伝承者たちの多くが３/９世紀半

ばのシリア地域の人物であることから、この時代にはすでに FBM に関する伝承がシリア地域に流通していたものと見ている。またそうであればこの地域で FBM に対する関心が芽生えたのはそれよりさらに早い時代のことであろうとし、2/8 世紀エルサレムのムカーティル・ブン・スライマーン Muqātil b. Sulaymān al-Balkhī（d. 150/767）が、彼のクルアーン解釈に関する著作の中でエルサレムの美徳を扱っていることを挙げ、FBM の起源を 2/8 世紀に定めている。

FBM がウマイヤ朝時代に生み出された理由についてエルアドは、ウマイヤ朝カリフたちが FBM を政治的プロパガンダの手段と見なし、その編纂を推奨することでエルサレムの政治的・宗教的地位を高めようとしていたことにあるとしている。またアッバース朝の台頭とともに政治の中心地がシリアからイラクに移った後は、カリフや知識人は FBM の編纂に無関心になったが、十字軍時代にシリアに新しい政治的状況が生み出された際に、FBM は再び隆盛を見るようになったとし、FBM の編纂はシリアにおける政治的状況に強く影響されたものであると主張している(11)。

キスター以降の研究者は総じて FBM を地方色の強いハディース集として出発したものであるとし、その起源を遅くとも 2/8 世紀にあると見ている。この点については、エルアドやムラードのイスナード検証からも妥当であると思われる。しかしながら、FBM の成立あるいは隆盛の要因として、ウマイヤ朝や十字軍時代のシリアのイスラーム勢力による政治的プロパガンダを挙げるシヴァンやエルアドの見解には、実際の FBM の編纂状況に照らすと疑問が残る。まずウマイヤ朝時代については、現存する最古の FBM であるワースィティー（表番号 5）が410/1019年(12)に執筆されたもの、アサリーが現存しないながら記録に残る最古の FBM であるとしているイスハーク・ブン・ビシュル Isḥāq b. Bishr al-Bukhārī（表番号 1）も 3/9 世紀以降の作品であり、ウマイヤ朝時代に編纂された FBM はまったく知られていない。そのためウマイヤ朝時代に FBM の編纂が推奨され政治目的のために利用されたかどうかは、実際には確かめることができない。また FBM を対十字軍プロパガンダとして見た場

合も、エルサレムが十字軍に占領された492/1099年から、アイユーブ朝スルタン・サラーフ・アッディーン Ṣalāḥ al-Dīn Yūsuf b. Ayyūb（r. 569/1174-591/1193）による583/1187年の回復までの期間に編纂されたのはイブン・アサーキル Ibn ‘Asākir（表番号８）の１作品のみであり、この期間に FBM の編纂が盛んになっていたとは言い難い。記録に残る FBM の編纂状況から判断すれば、FBM の編纂はむしろ583/1187年以降のアイユーブ朝とマムルーク朝の時代に集中していると言える。

先行研究の問題は、FBM 編纂の理由を史料状況からは証明しがたいウマイヤ朝や十字軍時代のみに求め、実際に編纂が盛んになっているアイユーブ朝・マムルーク朝時代の作品について触れていないという点にある。本稿ではこの問題点を考慮し、次章よりマムルーク朝時代に成立した作品を取り上げ、この時代の FBM の編纂動機、あるいはこの時代に編纂が盛んになっていく理由や社会的背景について検討したい。

第２章：ファザーリーによる FBM の再編纂

１．著者の経歴と作品の構成

BN（表番号19）の著者ファザーリーは、660/1262年ダマスカス生まれのシャーフィイー派知識人である。ダマスカスの著名な学者の家系の出身であり、父親の後を継いでバーダラーイーヤ学院 Madrasa al-Bādarā’īya の教師を務めた。生涯の大部分をダマスカスで活動した人物で、729/1329年に同学院内で没し、市内の墓地に埋葬されている(13)。

ファザーリーは作品の序文において、イブン・アルムラッジャーの『ファダーイル・バイト・アルマクディス *Faḍā’il Bayt al-Maqdis*（表番号６、以下 FBM-IM と略称）』とカースィム・イブン・アサーキル Qāsim Ibn ‘Asākirの『アクサー・モスクのファダーイルに関する集成 *Jāmi‘ al-Mustaqṣā fī Faḍā’il al-Masjid al-Aqṣā*（表番号10、以下 JM と略称）』の２作品を典拠として BN を編纂したことを記しており、自著をこれら２作品からの選集であるとしている(14)。

先行研究に指摘があるように、FBM はクルアーン解釈学や地方的なハディース集から発展してきた分野であり、新しい FBM の編纂は、基本的には既存の書物や伝承家の言葉をそのまま引用することで行われる。作品によってはその著者の同時代の要素が追加されることもあるが、既存の伝承に関しては時代が下ってもその内容が変化することはない。FBM-IM は、エルサレムやシリアに関する600を越える数の伝承を、それぞれの伝承に完全なイスナードを付した形で収集した伝承集型の作品である。これはマムルーク朝以前に編纂された作品の中では最も大きな伝承数を有する作品であり、BN はじめ後代の多くの FBM の主要な典拠となっている。JM については現存していないが、こちらも後代の数々の FBM の典拠として名前が挙げられていることから、FBM としてよく知られた作品であったと考えられる。

BN はこれらの「選集」であるという言葉の通り、FBM-IM に比べると分量の小さな作品となっているが、そのことは BN の中で扱われる伝承数が FBM-IM より少ないということと、BN においては従来の FBM には存在した、伝承のイスナード部分が省略されていることによるものである。ファザーリーは同じく序文の中で、「私は利便性のために、それらのすべてのイスナードを省略した」(15) と述べており、作品内では、教友などの伝承を最初に伝えた人物や、ブハーリー al-Bukhārī（d. 257/870）などの権威あるハディース集の著者の名前をイスナードに代えている。

BN は全13章から構成されており、各章の内容を概観すると次のようになっている。まず第 1 章がアクサー・モスク設立の由来について、第 2 ～ 5 章がエルサレムを訪れてそこで礼拝や祈願、断食、サダカ等を行った者に与えられる功徳について、第 6 ～ 8 章がエルサレムのハラム・アッシャリーフ Ḥaram al-Sharīf にあるモニュメントにまつわる伝承と、それらの場所に参詣する際の作法について、第 9 ～11章がエルサレム市外にある場所（オリーブ山 Ṭūr Zaytūn 等）にまつわる伝承について、第12章がその他様々なエルサレムに関する伝承の断片を集めた章、第13章がヘブロン参詣についての章であ

る。前述のように BN の分量は FBM-IM に比べると小さく、よって BN の章構成やその中で扱われている伝承の内容は、ファザーリーが FBM-IM あるいは JM から、ある編纂方針のもとに取捨選択した結果であると考えることができる。それではファザーリーは BN を編纂するにあたり、何に意識を置いていたのだろうか。

2．エルサレム参詣を意識したFBM編纂の始まり

BN の章構成からは、本作品がエルサレム参詣を推奨し、その助けとなるようなものとして編纂されていることがわかる。例えば第2章から第5章にかけては、エルサレムで様々な宗教的行いを行った者は罪を赦されて楽園に入ることができる、ということが述べられ、続く第6章から第8章にかけては、ハラム・アッシャリーフにある岩のドームや昇天のドーム、ハラムの壁や門など参詣すべきとされる場所を挙げ、それらの場所の由来や美徳にまつわる伝承とともに、具体的な参詣作法について述べられている。例えば岩のドームにおける参詣作法については、FBM-IM を引用することで次のように述べられている。

> アブー・アルマアーリー・アルムシャッラフ・ブン・アルムラッジャーは、「岩〔のドーム〕に入るときに望ましい祈願」の章の中で、次のように言っている：「岩〔のドーム〕に入る者は、以下のようにすることが望ましい：〔メッカの〕バイト・アルハラームの周りをタワーフ（メッカ巡礼の際にカアバ神殿の周囲を左回りに回る儀式）するのとは逆になるように、彼から見て右側に岩が来るようにして立つ。そして人々が祈願を捧げる場所に行き、手を岩の上に置く。しかし岩に口づけてはならない。そして祈願する。もしその者が岩の下〔にある洞窟〕に下りたいと思うなら、そうしてもよい。しかしその者は、至高なる神に自らの意図を申し上げ、悔い改め、礼拝と正しい祈願に努めなければならない。〔岩の下に〕下りたら、先に述べた祈願を行いながら然るべき礼拝を行う。彼は岩の下では真摯に祈願に努めることが望ましい。至高なる神がお望みになるならば、その場所での

祈願は聞き届けられる」(16)

BN では、エルサレムの歴史に関係する伝承、例えばイスラエル王ダビデ、ソロモンによる神殿建設やバビロン王ネブカドネツァルによるその破壊、ローマ・ビザンツ帝国によるエルサレム支配、第２代正統カリフ・ウマル・ブン・アルハッターブ ‘Umar b. al-Khaṭṭāb（r. 13/634-23/644）による征服、ウマイヤ朝カリフ・アブド・アルマリク・ブン・マルワーン ‘Abd al-Malik b. Marwān（r. 65/685-86/705）による岩のドーム建設などの伝承は、ほとんど取り入れられていない。これらは FBM-IM において、あるいはその他 BN 以前に編纂された FBM においては、１つの内容につき異なるイスナードを経由した複数の伝承が挙げられるなど多くの紙面が割かれ、重要視されている要素である。こうした要素が BN において省かれているのは、それが個々の参詣場所に直接結びつかないからであろう。

BN がエルサレム参詣のために編纂された作品であるということは、第13章がヘブロン参詣に充てられていることからも見て取れる。BN の第13章「偉大なる神の友〔アブラハム〕の墓に巡礼することの美徳」は、エルサレムの参詣作法に関する部分と同様に、イブン・アルムラッジャーの FBM-IM から引用されている(17)。この章では預言者アブラハムと彼の子孫の伝記や、彼らの墓があるとされるヘブロンの美徳とともに、ヘブロン参詣を推奨する伝承とそこでの参詣作法について述べられている。

神の友〔アブラハム〕、イサク、ヤコブのもとに参詣しようとする者には、次のようなことが望ましい。その意図を純粋なものとし、至高なる神に幸運とお助けを求める。２度のラクア（直立、おじぎ、跪拝の３つの動作を１セットとした礼拝の基本単位）を行い、その後で至高なる神に保護を求める。慈悲深き方の友がその者から反逆を感じることがないようにし、その参詣にはいかなる非礼もあってはならない。というのも、預言者たちはその墓の中で生きているからである。それから自らを低め、心静かに赦しを求めながらその場所に向かう。そしてモスクに右足から入って、次のように言う。「神の御名において。神の使徒

に平安あれ。おお神よ、ムハンマドとムハンマドの一族に祝福を与えたまえ。私をお赦しになり、私とすべてのムスリムに憐れみを垂れたまえ。まことにあなたは、あらゆる物事において力ある方であられます」。その後２度ラクアをし、モスクの永続を願う。それから神の友の墓に入り、どの方向からでもいいので彼の方に向かって立つ。そして彼に挨拶をして言う。「あなたの上に平安のあらんことを、預言者よ。神の恩寵と祝福のあらんことを。神の友に平安のあらんことを。神の恩寵と祝福のあらんことを」(18)

エルサレム参詣に続けてヘブロン参詣を行うという参詣ルートは、中世のムスリムたちの間で一般的なものであった。ヘブロン参詣についての研究を行ったエルアドによれば、ヘブロン Ḥabrā/Khalīl という地名がムスリムによる地理書に言及されるようになったのは３/９世紀末から４/10世紀初頭にかけてのことであり、これに続く時代にヘブロン参詣が盛んになり始めたという。エルアドは、FBM-IM 中のヘブロン参詣作法について記述された部分を参詣者のための案内書として捉えており、これがこのジャンルにおける最初の作品であるとしている(19)。エルサレムからヘブロンに至る参詣ルートは、旅行者たちの記録の中にも確認できる。例えば438/1047年にエルサレムを訪問したナースィル・ホスロー Nāṣir-i Khusraw（d. 465/1072〜471/1078）は、その同じ年にヘブロンを訪れ、アブラハムの墓に参詣している(20)。また569/1173年にエルサレムを訪れたハラウィー ʻAlī b. Abī Bakr al-Harawī（d. 611/1215）も同様に、エルサレム訪問の直後にヘブロンに向かっている(21)。以上のことから、このような参詣ルートは FBM-IM が編纂された５/11世紀前半にはすでに確立しており、以降のムスリムたちの間で実際に行われていたことがわかる。

BN におけるエルサレム・ヘブロン参詣作法に関する記述はいずれも FBM-IM からの引用であり、新しいものではない。しかしながらこの部分は、現存する限りにおいて BN 以前の FBM、すなわち４/11世紀半ばから８/14世紀初頭に編纂された作品には引用され

ておらず、その時期の FBM 著作家にとって FBM に必須の要素と見なされていたわけではないようである。それゆえファザーリーが FBM-IM からこうした要素を選び出していることは、彼が実際の参詣を意識して自身の作品の編纂を行ったことを示していると言えよう。ファザーリーは生涯に数度のハッジを行ったとされているが(22)、彼がエルサレム参詣を行ったかどうかは記録には残っていない。しかしながらこのような作品編纂を行っていることから、ファザーリーは実際に自身でエルサレム参詣を行ったのであろうと推察できる。

BN において示されたエルサレム参詣との関連性は、マムルーク朝後期に編纂された RM と IA の 2 作品の中にも引き継がれていく。これらの 2 作品は、それぞれの著者がエルサレム参詣を行った直後、あるいは参詣中に執筆されたものであり、この関連性の強さを示す例となっている。次章ではこれら 2 作品を詳しく検討する。

第 3 章：エルサレム参詣を契機として編纂された FBM の例

1．フサイニーによるエルサレム参詣と FBM 編纂

RM（表番号27）の著者フサイニーは、9 /15世紀シリアのシャーフィイー派法学者であった人物である。彼のフサイニーという名は、預言者ムハンマドの孫であるフサイン・ブン・アリー Ḥusayn b. ʻAlī（d. 61/680）に由来している。彼は800/1397-98年以降の年にダマスカスで生まれ、同地で教育を受けた。カーミル・ブン・アルバーリズィー Kāmil b. al-Bārizī という人物に同行してカイロに赴き、そこでも様々な知識人について学んでいる。帰郷後はこのカーミルの代理人としてダマスカスのカーディー（裁判官）や教授の職を務め、カーミルの死後にはアレッポのカーディーを務めた。後にアレッポでの職を辞して故郷に戻り、ダマスカスの自邸にて勤行に励む生活を送ったという。フサイニーは生涯何度もメッカ巡礼を行ったとされ、875/1470年メッカ巡礼中に没し、メッカ近郊のマアラート Maʻlāt に埋葬されている(23)。

フサイニーは871/1466-67年にエルサレムに参詣しており、そのときのことを RM の序文で次のように記している。

> 私は871年にアクサー・モスクを訪れた。私のそこでの滞在は４か月弱であった。私はそれらの神聖なる土地、高貴にして栄光ある参詣場所を見て、それらのファダーイルについて知りたいと思うようになった。というのも、そこへの参詣者としての用意ができていなかったからである。そこで私はそこの学識ある人に、その地にまつわる知識について尋ねた……しかし私は、何ひとつ答えてもらえなかった。そこで私はそうしたことに関する書物を求めたのだが、見つけられなかった。ゆえに私は寛大なる与え手たる讃えられし至高なる神に、そうしたことを容易にしてくれるものを編纂することについて、導きを求めることにした(24)。

この部分より、フサイニーはエルサレム参詣を契機として FBM の編纂に興味を持ったと見られる。RM の結びには、本書が872年ラビーウ・アルアッワル月19日（1467年10月27日）に完成したことが記されており(25)、彼は本書をエルサレム滞在中か、あるいはその直後の時期に執筆したということになる。

フサイニーは「エルサレムに関するファダーイルの書を見つけることができなかった」としつつも、実際にはファザーリー同様既存の作品を典拠として自著の編纂を行っており、続く序文でそうした書物の名前を挙げている。この部分の記述は、フサイニーの要求を十分に満たす内容を備えた FBM が存在しなかった、という意味に取るしかないだろう。いずれにせよ、彼は主たる引用元として11冊のファダーイルの書を挙げており、それらは順に FBM ６作品、３聖地のモスクとそこへの参詣に関するファダーイルの書２作品(26)、ファダーイル・アッシャーム２作品(27)、ファダーイル・アルハリール（ヘブロンに関するファダーイル）１作品(28)である。

フサイニーが典拠とした FBM を成立年代順に挙げれば、イブン・アルジャウズィー Ibn al-Jawzī（表番号９）、カースィム・イブン・アサーキル（表番号10）、アフマド・イブン・アサーキル Aḥmad Ibn

‘Asākir（表番号12）、ファザーリー（表番号19）、アラーイー al-‘Alā’ī（表番号21）、マクディスィー al-Maqdisī（表番号23）による作品となる。フサイニーはさらにアフマド・イブン・アサーキルとファザーリー、マクディスィーの作品の序文を引用し、アフマド・イブン・アサーキルが彼の父方の従兄にあたるカースィムの作品を直接の典拠としていること、ファザーリーがカースィム・イブン・アサーキルとイブン・アルムラッジャー（表番号６）を直接の典拠とし、また「利便性のために、それらのすべてからイスナードを省略した」(29)上で編纂を行っていること、マクディスィーが彼以前の FBM 編纂者とは異なり、作品内の各ハディースの真正性を明示するという編纂方針を取っていること(30)を述べている。なおフサイニーは、マクディスィーが批判する「彼以前の FBM 編纂者」とはカースィム・イブン・アサーキルを指すものであるとしている。

フサイニーは RM の典拠情報に続けて、序文の中で本書を37の章に分けて構成したと述べ、それぞれの章題を挙げている。それによれば RM の章構成は、第１章がアクサー・モスクやバイト・アルマクディスという名前の由来についての章、第２～６章がアクサー・モスク設立の由来とその美徳についての章、第７～12章がエルサレムで宗教的行いをした者に与えられる功徳についての章、第13～28章がエルサレム市内外のモニュメントにまつわる伝承と、それらの場所に参詣する際の作法についての章、第29～30章がイスラーム以降にエルサレムで起こった出来事についての章、第31章がエルサレムのその他のファダーイル集、第32～34章がエルサレムに縁のある預言者、教友、タービウーン（教友の後継世代）の中で著名な人々の伝記集、第35章が預言者アブラハムと彼の一族の伝記とヘブロン参詣についての章、第36章が預言者モーセの墓についての章、第37章がファダーイル・アッシャーム集となっている(31)。

RM の章構成はファザーリーの BN のそれによく似ており、これに倣ったものであると考えられる。ただし BN において取り上げられていなかったエルサレムの歴史に関する章、偉人たちの伝記集、預言者モーセの墓についての章、ファダーイル・アッシャーム集に

ついては BN 以外の典拠から取られたものであり、これらの要素が追加されたことで BN に比べてより広範な内容を扱う構成となっている。

以上のように RM は、マムルーク朝時代のエルサレム参詣と FBM との関連性を考える上で重要な作品と言えるのだが、現存する写本が少なく研究者が利用しにくいという問題点がある。FBM の写本研究を行ったアサリーによれば、RN の完全な写本はメディナのアーリフ・ヒクメト・アッシャリーフ図書館 Maktabat ʻĀrif Ḥikmet al-Sharīf（現マリク・アブド・アルアズィーズ図書館 Maktabat al-Malik ʻAbd al-ʻAzīz al-ʻĀmma）（カタログ番号3860、分類番号900/114）にのみ所蔵されている。ベルリン国立図書館 Staatsbibliothek zu Berlin にも１点所蔵されているが（書架番号 Wetzstein, 2, 1816; Ahlwardt Katalog, 6098）、こちらは全37章のうち序文と、第１章から第14章のみを含む不完全な写本である(32)。メディナ写本については、筆者がアブド・アルアズィーズ図書館に問い合わせたところ返答がもらえず、残念ながら入手できていない。

しかしながら RM の内容は、本書と同時代に編纂された IA の中にほぼ同じ形で取り入れられており、IA を参照することでこのような RM のベルリン写本の欠落を補うことが可能である。次節では RM を主要な典拠として編纂された IA を取り上げ、RM と合わせて２作品の形式や内容について考察したい。

２．ミンハージーによるエルサレム参詣と FBM 編纂

IA（表番号28）の著者ミンハージー（d. 880/1475）は813/1410年エジプトのアスユートに生まれたシャーフィイー派法学者であるが、彼の前半生については、アスユートにて育ちその後カイロに移住したこと以外は知られていない。848/1444年よりメッカ巡礼に出発するが、そのことは IA の序文でも述べられている。

それによれば、ミンハージーは848年ラビーゥ・アルアッワル月（1444年６月）にメッカに到着しウムラ（巡礼月であるズー・アルヒッジャ月以外の期間に行うメッカ巡礼）を行った後、そのままズー・ア

ルヒッジャ月までメッカに滞在し、続けてハッジを行った。翌849年の初め（1445年４月）にメディナに向かい、預言者ムハンマドの墓に参詣し、その年のズールヒッジャ月には再びメッカに戻って２回目のハッジを行っている。そして857年の初め（1453年１月）まで７年間メッカに滞在した後、およそ９年間に渡るヒジャーズ滞在を終えてカイロに帰還した。彼はこのヒジャーズからの帰途にエルサレム参詣を行いたいと考えていたが、この時点ではエルサレムに向かうことはできなかった。カイロ帰還後、ミンハージーはマムルーク朝スルタン・アシュラフ・バルスバーイ Ashraf Barsbāy（r. 827/1422-842/1438）の近臣であったアミール・ジャーニム・ベク Amīr Jānim Bek(33)に仕えることとなり、彼に重用された。その後ジャーニム・ベクがアレッポ総督に任命されると、ミンハージーも彼に同行してシリアに向かい、アレッポやダマスカスに滞在した。この時期に彼のエルサレム参詣の願望はますます強まり、また FBM の執筆も決意したようである。序文には次のようにこの決意が記されている。

> 私は至高なる神の御為に、自分自身にあることを課した。すなわち、もし私がバイト・アルマクディスに入り、そこを参詣するという願いを果たし、他の参詣者とともに望みの限りを尽くし、導きの道を通ってそこにある様々な遺跡を辿ることができたなら、必ずや私はバイト・アルマクディスの美徳やその奇跡、その古き特質、良きハディースが地の果てまでも届いており、今に至るまでその契約の上に続いているところの姿を書き記そうと。私はその中に、受け継がれてきた並々ならぬことの間から麗しい作品を集め、それによってこの家（バイト・アルマクディス）に仕えるという願いを果たそう。その家はラクダの鞍〔のハディース〕の中に含まれており、かの３つのモスクの中のひとつであるのだから(34)。

しかしミンハージーはしばらく参詣の機会を得ることができず、彼が念願のエルサレム参詣を果たしたのは874年ラマダーン月（1470年３月）になってのことであった。IA は彼のエルサレム滞在中に執

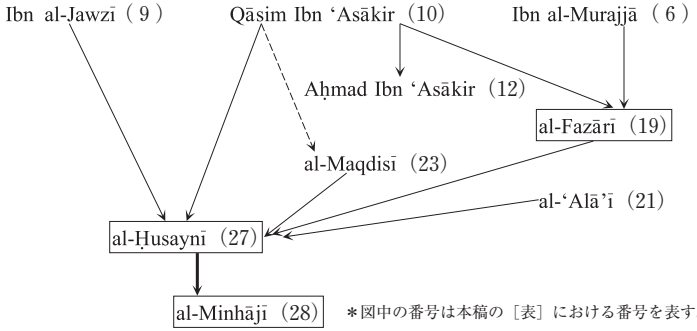
筆されたものであり、本書の結びには、875年サファル月23日（1470年８月23日）同地にて本書の執筆が完了したという旨が記されている[35]。彼がいつまでエルサレムに滞在したかは明らかではないが、おそらく数年以内のことであっただろう。後にカイロに帰還し、880/1475年同地にて没している[36]。

ミンハージーは IA を編纂するにあたり、マクディスィー（表番号23）の作品とフサイニーの RM の２作品を直接の典拠としたことを述べているのだが[37]、IA の序文の記述や章構成から判断して、ミンハージーはとりわけ後者に依拠していることがわかる。彼は IA の序文でフサイニーの名前を挙げた後に、「彼はその高貴にして独創的な著書の中で、〔彼が典拠とした〕それぞれの書物の序文の一部を伝えている」[38]と述べて、フサイニーが RM の序文で列挙していた典拠情報をそのままの形で引用している[39]。ミンハージーはこれらの典拠情報の最後で以下のように述べて、自身が RM を主たる典拠としていることを明記している。

> これが、前述のサイイド（フサイニー）が参照し、『繁き庭園 *Rawḍ al-Mugharras*』と名付けられたその著作においておおもとの引用を頼ったものである。これ以上はいかなるファダーイルの書からも参照を増やす必要はない。神はこの書とそこからの知識による利益を、ハディースにおける支えとして、また私が決意したこの著作の典拠として、永遠なるものとなさった[40]。

ここで、RM や IA の序文における典拠情報から明らかになる範囲において、IA に至る FBM 作品間の引用・被引用関係を図式化すると、次頁のようになる。

ミンハージーは典拠情報に続き、IA を全17の章で構成したことを述べている。それによれば、第１章がアクサー・モスクやバイト・アルマクディスという名前の由来と、エルサレムに関する全般的なファダーイルについての章、第２章がアクサー・モスク設立の由来とその美徳についての章、第３章が聖なる岩についての章、第４～７章がエルサレムで宗教的行いをした者に与えられる功徳についての章、第８章がエルサレム市内外のモニュメントにまつわる伝承と、



＊図中の番号は本稿の［表］における番号を表す。

それらの場所に参詣する際の作法についての章、第 9 章がイスラーム以降にエルサレムで起こった出来事についての章、第10章がエルサレムに縁のある預言者や教友たちの伝記集、第11～15章が預言者アブラハムと彼の一族の伝記とヘブロン参詣についての章、第16章が預言者モーセの墓についての章、第17章がファダーイル・アッシャーム集という構成となっている(41)。以上の章構成は RM とほぼ同一のものであり、ミンハージーはこの点において RM を全面的に踏襲している。

ミンハージーがエルサレムを訪れた874/1470年という時期は、フサイニーがエルサレム参詣と RM の編纂を行った871-72/1466-67年の直後に当たっている。おそらくミンハージーはエルサレム滞在中に RM を入手し、これに感銘を受けて IA の執筆に至ったのであろうが、わずか数年前に著されたものと同じ形の著作を編纂しているところから、彼の目的は既存の書物からただ単に FBM に関する知識を得ることではなく、あくまで自分自身の手で FBM を著すことであったと言える。すなわち IA は、ミンハージーのエルサレム参詣中に書かれたという点と合わせて、彼の個人的なエルサレム参詣を記録したものであったとも考えられるだろう。

RM と IA はほぼ同時期に編纂され、また両作品とも著者が晩年に行ったエルサレム参詣に際して編纂されていること、著者が編纂の数年後に没していることなど、作品成立の環境にも共通点が多い。このような共通点にも関わらず両作品の写本の残存状況には大きな

差があり、RM の写本については前述の通り完全なものは１つしか現存していないのに対し、IAは 多数の写本が残っており(42)、校訂本も出版されている(43)。IA は12/18世紀のオスマン朝時代に編纂された２つの FBM(44)において典拠として参照されており、これらの FBM が RM ではなく IA を参照していることから、12/18世紀の時点でも RM よりも IA の方が利用しやすい書物となっていたと考えられる。IA は、形式や内容の点において RM の模倣であり、FBM として新しい要素を持つものではないが、RM の内容を保存し後世に伝えるという意味において重要な役割を果たした作品であると言える。

お　わ　り　に

以上本稿では、マムルーク朝に編纂された３つの FBM を取り上げ、その編纂の動機や作品の形式、作品に特徴的な内容について検討した。まずファザーリーによる BN では、既存の FBM からエルサレム参詣に際して参詣すべきモニュメントやそこへの参詣作法が重点的に取り出されて編集されており、さらにそこにヘブロン参詣に関する伝承が追加され、全体としてエルサレムからヘブロンに至る一連の参詣ルートを意識した作品構成となっていた。BN において示されているエルサレム参詣を前提とした FBM の編纂は、その後 RM の著者フサイニーにも受け継がれていった。フサイニーは実際に自身のエルサレム参詣に際して FBM の編纂を行っており、この点からもエルサレム参詣と FBM 編纂の強い関連を指摘できる。ミンハージーの IA もエルサレム参詣を機に編纂された FBM の一例であった。ミンハージーは IA の形式や内容を全面的に RM に依拠しており FBM として新しいものではないが、オスマン朝時代の FBM 著作家に参照されることにより RM の内容を後世に伝えるという役割を果たしている。本稿では以上３つの FBM を検討し、当時エルサレム参詣を目的とする FBM 編纂の方向性があったことを明らかにした。

エルサレムが十字軍勢力より再びムスリムたちの手に戻って以来、

支配者層はムスリムの都市としてのエルサレムのイメージを確立させるため、マドラサ（学院）やリバート（宿泊・修道施設）などのワクフ施設を市内に数多く建設し、広い地域からウラマーをエルサレムに誘致した。例えばサラーフ・アッディーンは、エルサレム征服直後の585/1189年にはキリスト教徒が総大司教座として用いていた場所を接収してリバートを建設し、また588/1192年には聖アンナ教会をマドラサや病院に改めている。このようなエルサレムにおけるムスリム支配者層によって設置された数々のワクフ施設は、マムルーク朝末期エルサレムのウラマーであったムジール・アッディーン・ウライミー Mujīr al-Dīn ‘Abd al-Raḥmān b. Muḥammad al-‘Ulaymī al-Maqdisī（d. 928/1522）による FBM の中にも記録されている(45)。その結果エルサレムは学術センターとして、あるいは宗教的なセンターとしての地位を高め、居留者や参詣者も増加していった。本稿で検討した 3 つの FBM の性格は、当時のこのような社会情勢に影響を受けたものであると考えられる。

本稿で述べたようにマムルーク朝とはこの分野がひとつの変化を経験した時代であるが、この時期の FBM 編纂増加や変化の理由を十字軍によるエルサレム占領を受けた結果と見るべきであるかという点については、筆者はなお多くの検討の余地があると考える。FBM に対する十字軍の影響を主張する先行研究は、実際にはアイユーブ朝以降の作品を十分に検討しないままにこの結論に至っており、多様な FBM 作品の内容を踏まえた上での根拠を提示できていない。例えばムラードは、十字軍以前の作品ではユダヤ教・キリスト教由来の伝承の影響が強く見られたのに対し、十字軍以降の作品ではエルサレム解放のためのプロパガンダとしてそうした他の一神教と共通の伝承は排斥され、預言者ムハンマドに由来するイスラーム的な伝承との関連性が強くなると述べ、その根拠としてマクディスィー Muḥammad b. ‘Abd al-Wāḥid al-Maqdisī（d. 643/1245）による『ファダーイル・バイト・アルマクディス *Faḍā’il Bayt al-Maqdis*』（表番号14）を挙げている(46)。しかしながらこれはあくまでこの作品のみに見られる傾向である。本稿で取り上げたフサイニーやミン

ハージーの作品中には、ダビデやソロモンによる神殿建設やアブラハムとその一族の伝記をはじめとするユダヤ教・キリスト教由来の伝承が豊富に見られることから、ムラードの主張する傾向が十字軍以降の作品に共通するものであるとは言えない。

こうした論点から見ても、今後の FBM 研究ではアイユーブ朝以降の作品に注目した上で作品間の関連性や相違点を検討するといった、FBM という分野全体を視野に収めた研究が必要となる。そうした研究は、当時のシリア周辺のムスリム知識人が持っていたエルサレム観やその変化、またそれが生み出された社会的背景を明らかにし、歴史史料としての FBM の有用性を示すものとなるだろう。

註

（1） R. Sellheim, “FAḌĪLA”, *The Encyclopaedia of Islam, new edition*, Leiden, 1954-2004.

（2） Kāmil Jamīl al-‘Asalī, *Makhṭūṭāt Faḍā’il Bayt al-Maqdis*, Amman, 1984. またこれと同様の研究には、Maḥmūd Ibrāhīm, *Faḍā’il Bayt al-Maqdis fī Makhṭūṭāt ‘Arabīyāt Qudsīyāt*, Amman, 1985がある。

（3） al-‘Asalī, pp. 30-34.

（4） Ibn ‘Asākir, *Faḍā’il Bayt al-Maqdis*（表番号 8）; Muḥammad b. ‘Abd al-Wāḥid al-Maqdisī, *Faḍā’il Bayt al-Maqdis*（表番号14）. イブン・アサーキルの著作についてはハサンの研究に指摘があるが、現存しないものである。Izhak Hasson, “The Muslim View of Jerusalem: The Qur’ān and Ḥadīth”, J. Prower and H. Ben-Shamai（eds.）, *The History of Jerusalem: The Early Muslim Period 638-1099*, Jerusalem, 1996, pp. 349-385. 一方マクディスィーの著作についてはダマスカスのザーヒリーヤ図書館 Maktaba al-Ẓāhrīya（現アサド図書館 Maktabat al-Asad al-Waṭanīya）に写本の所蔵があり（majmū‘, 48）、ハーフィズ Muḥammad Muṭī‘ al-Ḥāfiẓ によって校訂テキストが出版されている。ハーフィズによれば、これは 3 部から構成されていた著作の第 2 部に当たるものであり、第 1 部と第 3 部は現存していないが、シリアの各都市に関するファダーイルを取り扱うものであった。ハーフィズは、本書は『ファダーイル・アッシャーム *Faḍā’il al-Shām*』

という題でザーヒリーヤ図書館に所蔵されているため、アサリーはこれを見落としたのであろう、と述べている。Muḥammad b. ‘Abd al-Wāḥid al-Maqdisī, *Faḍā’il Bayt al-Maqdis*, ed. Muḥammad Muṭī‘ al-Ḥāfiẓ, Damascus, 1988, pp. 25-28.

（5） Emmanuel Sivan, “The Beginning of Faḍā’il al-Quds Literature”, *Der Islam*, 48, 1971, pp. 100-110.

（6） Meir J. Kister, “A Comment on the Antiquity of Traditions Praising Jerusalem”, Yad Itzhak Ben Zvi（ed.）, *The Jerusalem Cathedra*, Jerusalem, 1981, pp. 185-186.

（7） Gautier H. A. Juynboll, *Muslim Tradition: Studies in Chronology, Provenance, and Authorship of Early Hadith*, Cambridge, 1983.

（8） Amikam Elad, “The History and Topography of Jerusalem during the Early Islamic Period: The Historical Value of Faḍā’il al-Quds Literature（a Reconsideration）”, *Jerusalem Studies in Arabic and Islam*, 14, 1991, pp. 41-70; Amikam Elad, *Medieval Jerusalem and Islamic Worship*, Leiden, 1995, pp. 41-70.

（9） Elad, 1991, pp. 48-52.

（10） Suleiman A. Mourad, “A Note on the Origin of Faḍā’il Bayt al-Maqdis”, *Abḥāth: The Quarterly Journal of the American University of Beirut*, 44, 1996, pp. 31-48; Suleiman A. Mourad, “The Symbolism of Jerusalem in Early Islam”, T. Mayer and Suleiman A. Mourad（eds.）, *Jerusalem: Idea and Reality*, New York, 2008, pp. 86-102.

（11） Elad, 1995, pp. 12-15.

（12） ワースィティーの編纂年代については、著作の冒頭にある伝承のイスナード中に、「ワースィティーとして知られる、イマームにしてハティーブたるアブー・ムハンマド・アブド・アルアズィーズ・ブン・アフマド・ブン・ムハンマド・アルマクディスィー Abū Muḥammad ‘Abd al-‘Azīz b. Aḥmad b. Muḥammad al-Maqdisī が我々に、バイト・アルマクディスにある彼の住まいにて410年に伝えた」とある。Muḥammad b. Aḥmad al-Wāsiṭī, *Faḍā’il al-Bayt al-Muqaddas*, ed. Issac Hasson, Jerusalem, 1979, p. 4.

（13） al-Fazārī, *Bā‘ith al-Nufūs ilā Ziyārat al-Quds al-Maḥrūs*, eds. Aḥmad ‘Abd al-Bāsiṭ Ḥāmid and Aḥmad ‘Abd al-Sitār ‘Abd al-Ḥalīm, Cairo, 2009（2nd ed.）,

pp. 19-23; Khayr al-Dīn al-Ziriklī, *al-A'lām*, 8 vols., Beirut, 2007（17th ed.）, vol. 1, pp. 45-46; 'Umar Riḍā Kaḥḥāla, *Mu'jam al-Mu'allifīn*, 4 vols., Beirut, 1993, vol. 1, p. 34.

（14） al-Fazārī, pp. 1-2.

（15） al-Fazārī, p. 2.

（16） al-Fazārī, p. 54. この部分の内容は、FBM-IM の第14章「聖なる岩〔のドーム〕に入るときに望ましい祈願」の内容に一致している。
Ibn al-Murajjā, *Faḍā'il Bayt al-Maqdis*, ed. Amīn Naṣr al-Dīn al-Azharī, Beirut, 2002, pp. 81-86.

（17） al-Fazārī, pp. 105-119. この部分の内容は、FBM-IM の第115章「ファダーイル・アッシャーム集」の最後にある、ヘブロンについてのファダーイルの部分を要約したものである（Ibn al-Murajjā, pp. 459-493）。

（18） al-Fazārī, pp. 112-113.

（19） Amikam Elad, "Pilgrims and Pilgrimage to Hebron（al-Khalīl）during the Early Muslim Period（638?-1099）", B. F. Le Beau and M. Mor（eds.）, *Pilgrim and Travelers to the Holy Land*, Nebraska, 1996, pp. 21-62.

（20） Nāṣir-i Khusraw, *Safarnāma*, ed. Muḥammad Dabīr Siyāqī, Teheran, 1935, pp. 34-63.

（21） 'Alī b. Abī Bakr al-Harawī, *Ishārāt ilā Ma'rifat al-Ziyārāt*, ed. Janine Sourdel-Thomine, Damascus, 1953, pp. 24-31.

（22） al-Fazārī, p. 22（校訂者による序文のページ番号）.

（23） Muḥammad b. 'Abd al-Raḥmān al-Sakhāwī, *al-Ḍaw' al-Lāmi' li-Ahl al-Qarn al-Tāsi'*, 12 vols., Beirut, 1992, vol. 5, p. 106.

（24） al-Ḥusaynī, *Rawḍ al-Mugharras fī Faḍā'il Bayt al-Maqdis*, Staatsbibliothek zu Berlin, MS. Ahlwardt Katalog, 6098, ff. 123b-124a.

（25） イブラーヒームによる、メディナのアーリフ・ヒクメト・アッシャリーフ図書館 Maktabat 'Ārif Ḥikmet al-Sharīf（現マリク・アブド・アルアズィーズ図書館 Maktabat al-Malik 'Abd al-'Azīz al-'Āmma）所蔵写本（MS. 900/114）からの部分校訂。Maḥmūd Ibrāhīm, pp. 458-459.

（26） Muḥammad b. Bahādir al-Zarkashī（d. 794/1392）, *I'lām al-Sājid bi-Akhkām al-Masājid*, ed. Muṣṭafā al-Murāghī, Cairo, 2007（3rd ed.）; Aḥmad b. al-'Imād

al-Aqfahsī (d. 808/1405), *Tashīl al-Maqāsid li-Zawwār al-Masājid*.

(27) ‘Alī b. Muḥammad al-Raba‘ī (d. 444/1052), *Faḍā’il al-Shām wa Faḍl Dimashq*, ed. ‘Ādil b. Sa‘d, Beirut, 2001; al-Fazārī, *I‘lām bi-Faḍā’il al-Shām*. なおこのファザーリーは、BN の著者と同一人物である。

(28) Isḥāq b. Ibrāhīm al-Tadmurī (d. 833/1430), *Muthīr al-Gharām fi Ziyārat al-Khalīl*. 著者であるタドムリーはフサイニーとミンハージーの同時代人で、ヘブロンのモスクのイマームを務めた人物である。al-Ziriklī, vol. 1, p. 293; Kaḥḥāla, vol. 1, p. 338; al-Sakhāwī, vol. 2, pp. 276-277.

(29) al-Ḥusaynī, f. 124a. この部分の引用は BN の序文の内容に一致する。註（14）参照。

(30) al-Ḥusaynī, f. 124b. この部分の引用はマクディスィーの序文の内容に一致する。Aḥmad b. Muḥammad al-Maqdisī, *Muthīr al-Gharām ilā Ziyārat al-Quds wa al-Shām*, ed. Aḥmad al-Khaṭīmī, Beirut, 1994, p. 64.

(31) al-Ḥusaynī, ff. 125a-127b.

(32) al-‘Asalī, pp. 91-92.

(33) サハーウィーが “Jānim nā’ib qal‘at Ḥalab” として名前を挙げている人物であろう。サハーウィーは、この人物は当時のスルタンの近臣にして娘婿であり、この妻と同年の897/1491-92年に没したとしている。al-Sakhāwī, vol. 3, p. 65.

(34) al-Minhājī, *Itḥāf al-Akhiṣṣā’ bi-Faḍā’il al-Masjid al-Aqṣā*, ed. Aḥmad Ramaḍān Aḥmad, 2 vols., Cairo, 1982, vol. 1, p. 80. なお引用文中の「ラクダの鞍〔のハディース〕」とは、預言者ムハンマドによる「メッカの聖なるモスク、メディナの神の使徒のモスク、バイト・アルマクディスのモスクの３つだけに向けて出発せよ」というハディースのこと。

(35) al-Minhājī, vol. 2, p. 173.

(36) al-Minhājī, vol. 1, pp. 24, 77-82; al-Ziriklī, vol. 5, p. 334; Kaḥḥāla, vol. 3, p. 85; al-Sakhāwī, vol. 7, p. 13.

(37) al-Minhājī, vol. 1, p. 83.

(38) al-Minhājī, vol. 1, p. 83.

(39) al-Minhājī, vol. 1, pp. 84-87. この部分の内容は al-Ḥusaynī, ff. 123b-124a に一致。

(40)　al-Minhājī, vol. 1, p. 88.

(41)　al-Minhājī, vol. 1, pp. 88-92.

(42)　al-‘Asalī, pp. 98-104; Carl Brockelmann, *Geschichte der arabischen Litteratur*, 5 vols., Leiden, 1937-1949, vol. 2, pp. 132-133.

(43)　本書の校訂本は2種類出版されている。1つ目はアフマド Aḥmad Ramaḍān Aḥmad による1982年の版で、ハラム図書館写本（Maktabat al-Ḥaram al-Makkī al-Sharīf (Makka), tārīkh 192, tārīkh 327）とダール・アルクトゥブ写本（Dār al-Kutub al-Qawmīya (Cairo), tārīkh 407, tārīkh 1879）の計4本の写本を用いたもの、2つ目はマズィーディー Aḥmad Farīd al-Mazīdī による2010年の版である。後者については前者と同じ写本を用いているが、各写本間の相違を注釈していないなど基本的な校訂の手法に則っていないため、参照の価値はない。よって本稿では前者の校訂本に従っている。

(44)　Muḥammad b. Muḥammad al-Khalīl (d. 1148/1743), *Risāla fi ‘Ayn Bayt al-Maqdis*（Staatsbibliothek zu Berlin, MS. Ahlwardt Katalog, 6101）; Muṣṭafā b. As‘ad al-Luqaymī (d. 1178/1765), *Laṭā’if Uns al-Jalīl fi Taḥā’if al-Quds wa al-Khalīl*（Staatsbibliothek zu Berlin, MS. Ahlwardt Katalog, 6102).

(45)　Mujīr al-Dīn ‘Abd al-Raḥmān b. Muḥammad al-‘Ulaymī, *Uns al-Jalīl bi-Tārīkh al-Quds wa al-Khalīl*, 2 vols., ed. ‘Adnān Yūsuf ‘Abd al-Mujīd, Nabulus, 1999. アイユーブ朝からマムルーク朝にかけてのエルサレムにおけるワクフ設立については、三浦徹、フランケルの研究に詳しい。三浦徹「中世エルサレムにおける救貧」長谷部史彦（編著）『中世環地中海圏都市の救貧』慶応義塾大学出版会, 2004, pp. 127-181; Yehoshua Frenkel, “Muslim Pilgrimage to Jerusalem in the Mamluk Period”, B. F. Le Beau and M. Mor (eds.), *Pilgrims and Travelers to the Holy Land*, Nebraska, 1996, pp.63-87.

(46)　Mourad, 2008, pp. 98-99.

（神戸大学大学院文化学研究科博士課程後期）